

hitosao
一竿遺跡（3次調査）

ふくおかけん や め したての ひとさお
福岡県八女市立野字一竿所在遺跡の調査報告書

八女市文化財調査報告書 第82集

2008

八女市教育委員会

序

八女市の西端付近に位置している立野地区周辺には、数多くの弥生時代の遺跡が所在しています。

今回調査が行われました立野地区は、近年になってようやく本格的な文化財の学術調査が行われるようになったところです。その端緒となりましたのは、平成5年度から始まりました県営農村活性化住環境整備事業に伴う事前発掘調査であります。この一連の発掘調査により立野・蒲原地区の弥生時代遺跡には多数の竪穴式住居や甕棺や土壙墓が検出され、九州で2番目の発見となった弥生時代前期の二重環濠が発見されました。また、たくさんの土器や石包丁、石斧が出土し、大きな話題となりました。この発見の後も、地道な発掘調査・分析が行われ、現在では、立野集落を中心とした周辺の微高地上には広く遺跡が展開している事がわかってまいりました。

比較的穏やかな時間の流れの中にあった当地区においても、国道442号線や旧矢部線跡沿線では住民ニーズに答える形で開発が急ピッチで進むようになりました。

貴重な文化遺産である遺跡を、地権者の方々の努力と御理解のみで現状を保存してゆくのは非常に困難な事であり、八女市教育委員会では現在、事業地における事前発掘調査を行い、遺跡を記録として保存し、後世に伝えていく発掘調査事業を継続して行っています。

今回、発掘調査を実施した一竿遺跡（3次調査）は立野遺跡群と呼ばれる周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地であり、今回の調査地もその遺跡群の北辺部に位置しておりましたので、事業者の御協力のもと、発掘調査を行わせて頂きました。

詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、当遺跡の広がりを認識する上で、大きな成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該遺跡、そして八女市にある全ての文化財に対する、愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に際し格段のご協力とご理解をいただきました福岡八女農業協同組合 代表理事組合長 松延 利博 様をはじめ、関係者各位、そして地元立野地区の皆様には並々ならぬご理解と応援を戴きました。

ここに深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜われますよう重ねてお願い申し上げます。

平成20年3月31日

八女市教育委員会

教育長 中島清志

例 言

- 1 本書は八女市教育委員会が、福岡八女農業協同組合 代表理事組合長 松延 利博より委託を受けて八女市教育委員会が実施した八女市立野字一竿に所在する弥生時代中期から後期を中心とした一竿遺跡（3次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
発掘現場における調査は平成18年度に行い、整理作業及び報告書作成は、平成19年度に行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、溝状遺構をSD、土壇をSK、不明遺構をSX、と表記した。
- 4 本書に使用した測量図の作成は国土地理院の国土座標（世界標準系）を基準とし、大塚を中心に参加者で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した写真は、大塚が撮影を行った。
- 6 本書使用の標高は海拔高であり、方位は全て磁北である。本地域における真北との偏差は約 $6^{\circ}10'$ である。
- 7 本書の執筆、及び、編集は大塚が担当した。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は、現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I	調査の経過	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	3
III	調査の内容	6
1.	調査経過	6
2.	検出遺構及び出土遺物	6
a)	溝状遺構 (SD)	6
b)	不明遺構 (SX)	9
c)	土壌 (SK)	10
IV	まとめ	13

挿図目次

第 1 図	一竿遺跡 (3 次調査) 位置図と周辺の遺跡 [1/25, 000]	4
第 2 図	一竿遺跡 (3 次調査) 位置図 [1/2, 500]	5
第 3 図	一竿遺跡 (3 次調査) 遺構配置図 [1/250]	6
第 4 図	調査区東側検出遺構群 実測図 [1/160]	7
第 5 図	SD-03 A 土層断面実測図 [1/40]	7
第 6 図	SD-03 B 土層断面実測図 [1/40]	7
第 7 図	SD-03・05 出土遺物 実測図 [1/3]	8
第 8 図	SX-01 実測図 [1/160]	10
第 9 図	SX-01 A 土層断面実測図 [1/50]	10
第 10 図	SX-01 出土遺物 実測図 [1/3]	11

図版目次

PL 1~PL 5	一竿遺跡 (3 次調査) 現地調査状況
PL 6~PL 7	一竿遺跡 (3 次調査) 出土遺物

表目次

第 1 表	一竿遺跡 (3 次調査) 出土遺物観察表	12
-------	----------------------	----

I 調査の経過

1 調査に至る経過

八女市の西部に位置する立野地区は、市内でも有数の弥生遺跡密集度が高い地域として注目を浴びる場所である。

近年、当地区においても住宅の建築やほ場整備等の農地開発事業が進んできており、これらを原因とした発掘調査が行われ、その結果、徐々にではあるが当地域の古代における実態がわずかながら把握出来るようになってきた。

しかしながら、開発の波は結果的に古代の痕跡を狭めて行く事となり、今後も当該地域も含め市域全体に対し注意を払う必要があるであろう。

今回の調査の発端は、福岡県八女農業協同組合が立野地区で事業を展開している選果場敷地内での店舗兼資材倉庫建設の為である。

平成18年6月8日付において福岡県八女農業協同組合 代表理事組合長 樋口和典より、埋蔵文化財の発掘調査依頼（18八生文第64号）が提出され、八女市教育委員会は事業者との協議に入った。この協議において事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接している事、平成8・10年度において東隣接地の発掘調査を行っており、多数の埋蔵文化財が確認されている事を説明し、開発にあたり文化財保護法第93条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘の届出を提出して頂く旨事業者にお伝えし、発掘調査に向けた実質的な協議を継続して行った。

平成18年 7月26日付けにより、事業者より店舗兼資材倉庫建設工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出（18八生文第123号）が提出され、また同日、平成18年7月26日付けで埋蔵文化財発掘調査・整理調査に係る協定書及び埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を交わし、平成18年8月21日から同年11月27日まで現地において発掘調査を行った。

また、整理調査においては、平成18年度に締結した協定書に基づき平成19年度に八女市教育委員会が整理調査事業主体者となり整理事業にも着手した。

発掘・整理調査における体制は以下の通りである。

2 調査体制

〔工事事業主体〕

福岡八女農業協同組合

代表理事組合長 樋口 和典（平成18年6月23日退任）

福岡八女農業協同組合

代表理事組合長 松延 利博（平成18年6月23日就任）

〔調査主体〕

八女市教育委員会

【平成18年度】（平成18年9月まで）

教 育 長 中島 清志

生涯学習課長 大津山 篤（兼学校教育課長）

同課長補佐 古庄 龍美

文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（発掘調査担当）

【平成18年度】（平成18年10月から。旧上陽町との合併による）

教 育 長	中島 清志
社会教育課長	飯田 せつ子
同課長補佐	松崎 保元
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（発掘調査担当）

【平成19年度】

教 育 長	中島 清志
社会教育課長	飯田 せつ子
同課長補佐	松崎 保元
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（整理調査担当）
同 嘱託	立石 真二（平成19年10月から平成20年3月31日まで）

調査作業（五十音順）

石井 勇、北原睦子、谷川義則、月足まつみ、鶴賀久博、野田早百合

整理作業（五十音順）

藤本祐子、野間口靖子

なお、発掘調査にあたり、福岡八女農業協同組合 代表理事組合長 松延 利博 様、及び関係者の皆様からは調査中に多大なる御援助・御協力を賜りました。また、周辺地域の住民の方々には多大なるご配慮とご理解を賜り、本調査に対し暖かいご声援を戴きました。紙面上で恐縮とは存じますが、御礼申し上げます。

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部に位置し、西に筑後市、東に黒木町、北に広川町、南に立花町・みやま市と2市3町と境を接し、主に農業を基幹産業としている。その立地は、耳縄山地南緩斜面より西方に延びる八女台地（八女丘陵）と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

一竿遺跡は八女市の西部に位置する立野地区にある。周辺には広大な水田や畑が広がり、八女市内有数の穀倉地帯である事を実感出来る。特に南西部方向にはほ場整備事業地が広がっており、整然と並んだ耕作地は農業の合理化推進が進んでいる事を明示している。

交通事情に目を移すと、当地は国道442号線沿いの南側にあり、旧国鉄矢部線跡に整備された道路が東西を貫いている。交通事情の面からすれば大変利便性の高い地ではあるが、水田や畑、園芸ハウスなどに囲まれた閑静な地域となっており、農産物生産・居住環境としてはこの上ない立地となっている。

【歴史的環境】

一竿遺跡（3次調査）は八女市立野字一竿に所在する弥生時代中期から後期を中心とした遺跡である。

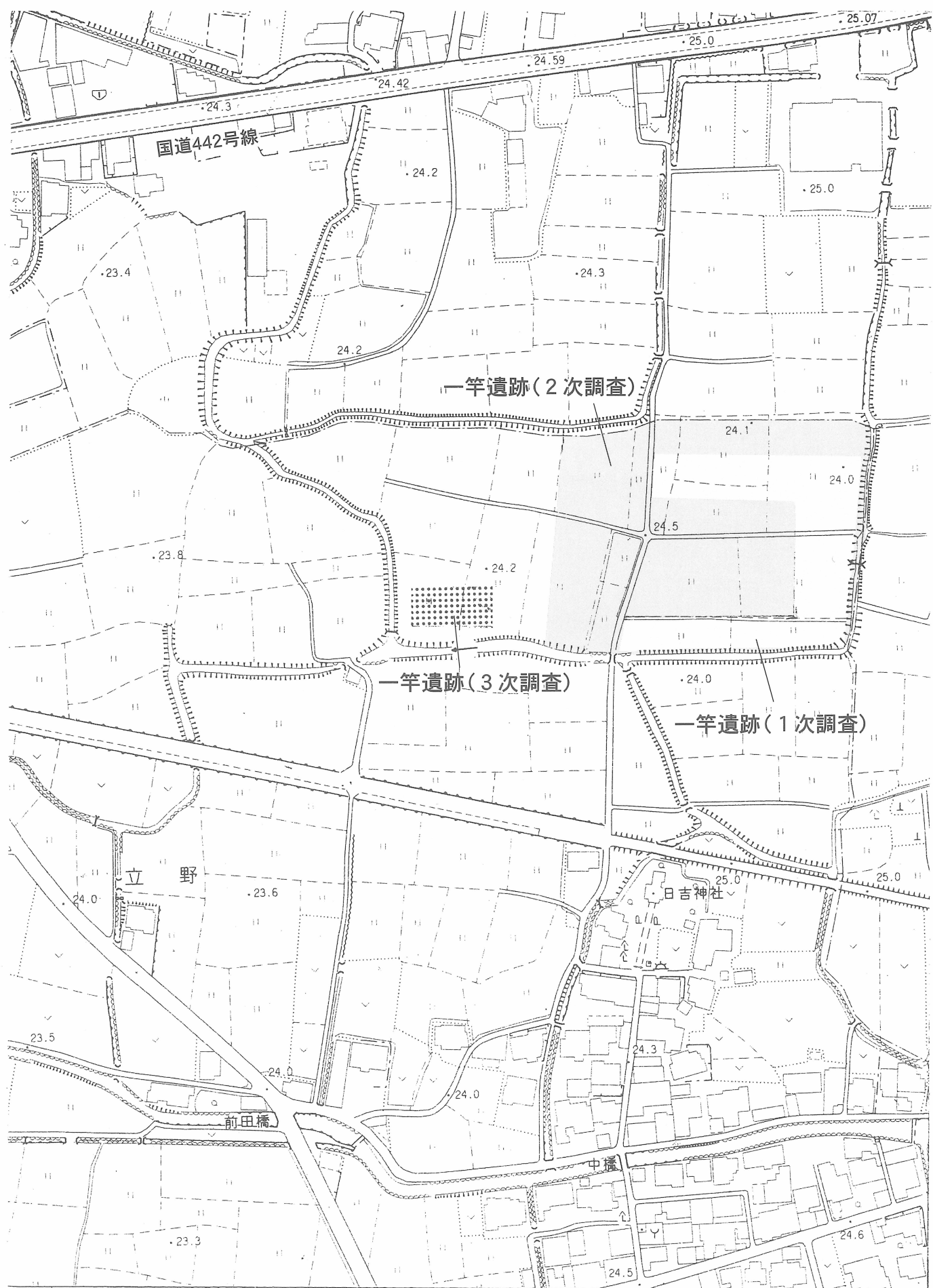
当該遺跡周辺は、20年程前から各種調査等の成果により、弥生時代を中心とした遺跡の一大密集地区であることが判明している。ここでは、一竿遺跡と隣接する立野遺跡群と周辺の遺跡群も含め、これまでに発掘等調査を受けた遺跡などを見渡し、八女市南・西部における弥生時代、及び、古墳時代の遺跡についての概略を記述する。

現在、八女市内における弥生時代最古段階の遺跡は亀ノ甲遺跡と宿町遺跡、立野・大坪遺跡が挙げられる。3遺跡とも弥生時代前期後半頃の環濠遺跡であるが、宿町遺跡（単環濠）と立野・大坪遺跡（二重環濠）は直径が100m前後と比較的小規模な上に貯蔵穴専用環濠と考えられるのに対し、亀ノ甲遺跡（単環濠？）は推定直径200mの規模を有し、未確認ながら環濠集落的な内容を十分にもつ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になることが多く、前期後半以前には稲作が定着していたものと考えられる。

中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のような大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡等から鉄器が出土するようになるなど、その普及と相前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取できる。

後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区では野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡等があり、後二者からは鉄器や砥石が数点出土している。矢部川に面した南部地区では、現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に規模の大きな貯蔵穴群域があり、近くには墳墓域も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは内行花文鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭とともに大規模集落同士の統合が進んでいることを示唆している。





第2図 一竿遺跡(3次調査) 位置図 [1/2, 500]

Ⅲ 調査の内容

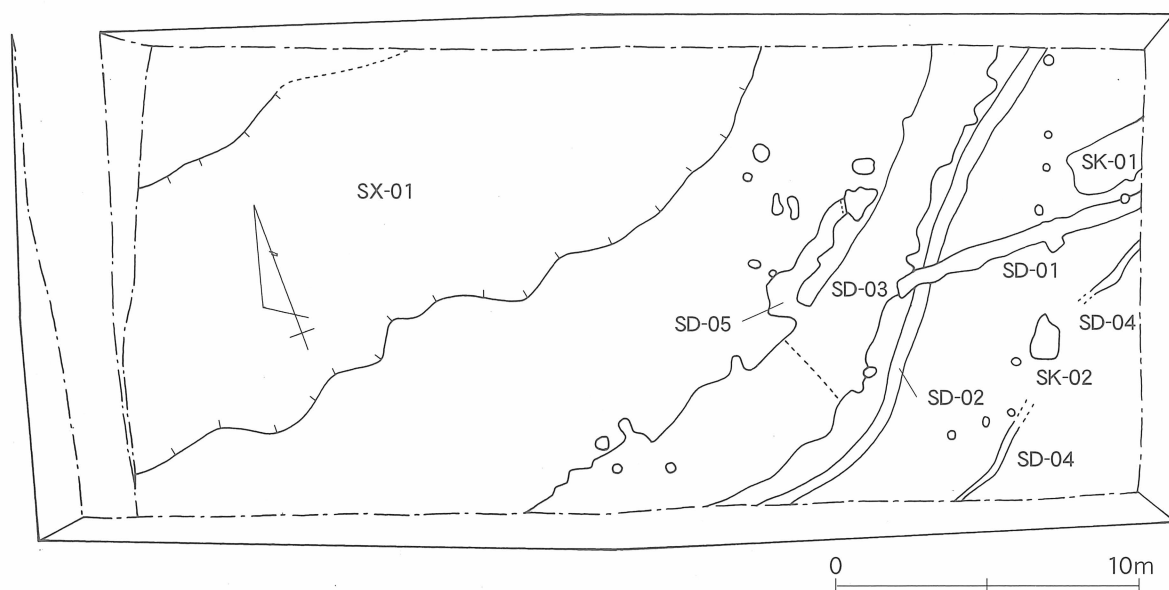
1. 調査経過

今回の調査は、当地に福岡八女農協協同組合が店舗兼資材倉庫建設を行う為の事前調査であった。

資材倉庫を兼ね備える為に非常に強固な基礎が必要となり、地表面下2m前後までのパイル打ちが予定された。

事業主体者との協議の結果、埋蔵文化財に対し影響が及ぶ可能性が考えられる建物について発掘調査を実施する事になり、平成18年8月から同年11月まで現地において発掘調査を行った。

調査の結果、弥生時代中期～後期を中心とした遺構群が検出され、生活域外縁の一部である事が判明した。以下、各遺構別に詳細を記述する。



第3図 一竿遺跡（3次調査） 遺構配置図 [1/250]

2. 検出遺構及び出土遺物

（a）溝状遺構（SD）

1号溝（SD-01） [第4図 PL2]

調査区東側を東西方向に延びる溝。規模は検出全長7.8m、幅0.34m、深さ4cmを測る。非常に浅く、埋土は淡灰色を基本とした比較的時代の新しいものと考えられる。溝底面もフラットであり、また水流を示す砂礫等が確認できない事から、人為的な区画用の溝とも思われる。

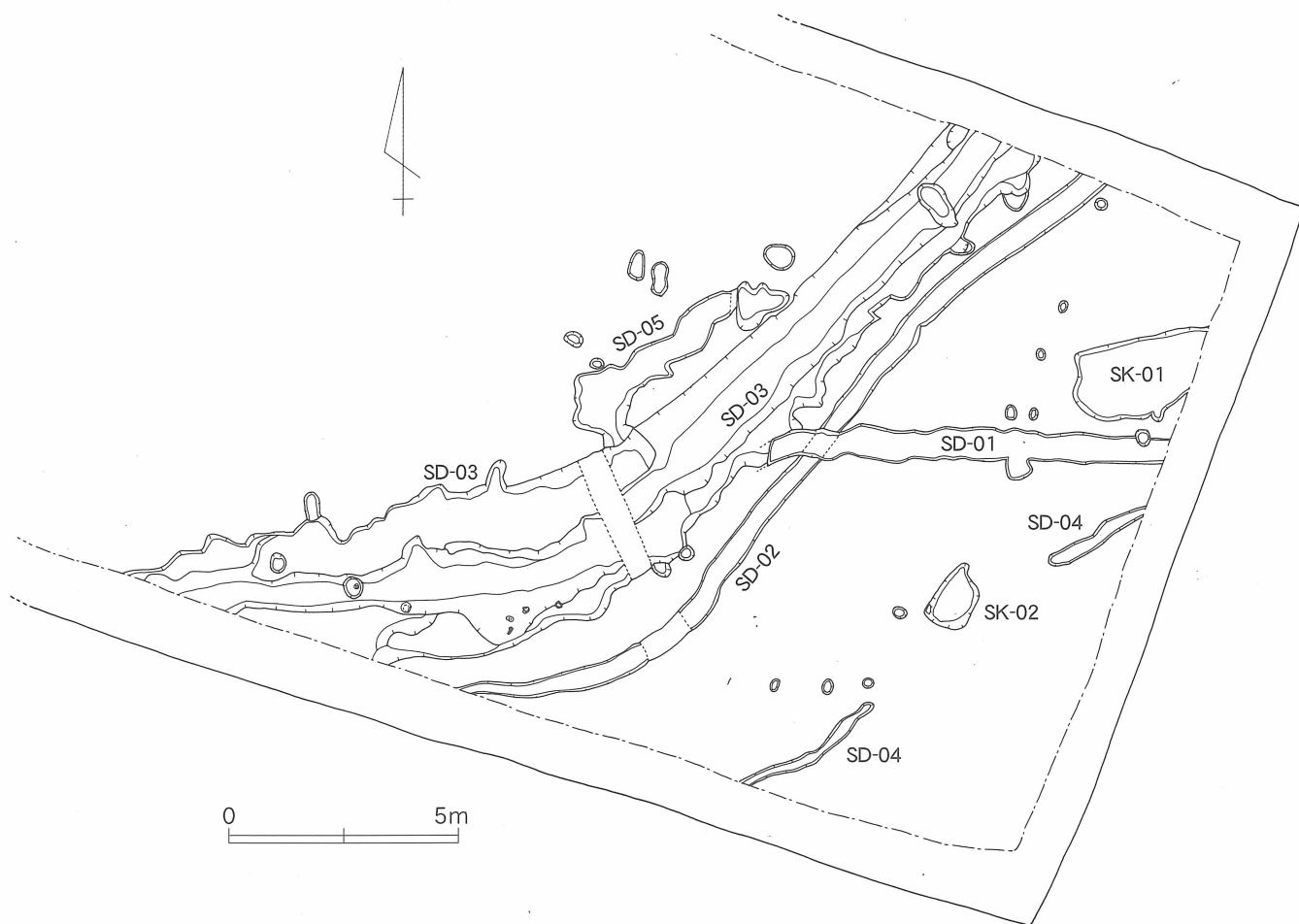
出土遺物は少なく、土器の小破片が僅かに出土したにとどまった。細片であった為、図化はしていない。

2号溝（SD-02） [第4図 PL2]

調査区東側を北東から南西方向にS字状に湾曲しながら長く延び、地形線に平行しながら掘削された溝である。規模は検出全長18.2m、幅0.48m～0.56m、深さ8cmを測る。溝底面レベルの標高は南北で10cmの差をみる。溝断面は逆台形を呈し、埋土主体は黒灰色の粘質土で、水流を示す砂礫等は確認できなかった。このことから排水施設とは考えにくく、区画に主眼を置いた溝であると考えたい。

SD-03とはほぼ方向を同一とし、一定の距離を保つところから、同時期並存の可能性が高い。

出土遺物は少なく、土器の小破片が僅かに出土したにとどまった。細片であった為、図化はしていない。

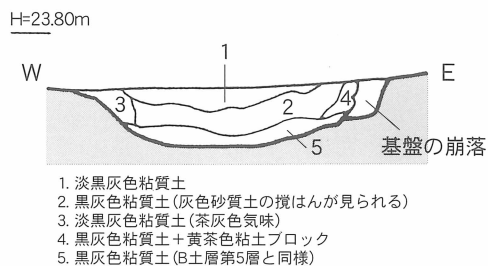


第4図 調査区東側検出遺構群 実測図 [1/160]

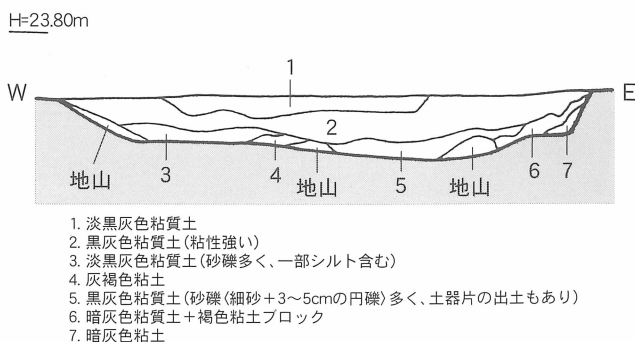
3号溝 (SD-03) [第4・5・6図 PL2・3]

調査区東側を北東から南西方向に延び、南端付近で大きく流路を西に向けつつ地形線に平行しながら掘削された溝である。規模は検出全長21.2m、幅1.72m~3.48m、深さ0.31m~0.42mを測る。溝底面レベルの標高は南北で8cmの差をみる。溝の底面からは2~3cmの円礫を含む砂礫層が検出され、比較的水流が早く、水量も多かった事が考えられる。また、当調査地から東側に展開する集落群から続く台地が、本溝を境に西に向かい標高を下げる事から、この地点が台地の端部付近に位置し、集落群における西端部であった事が推定出来る。

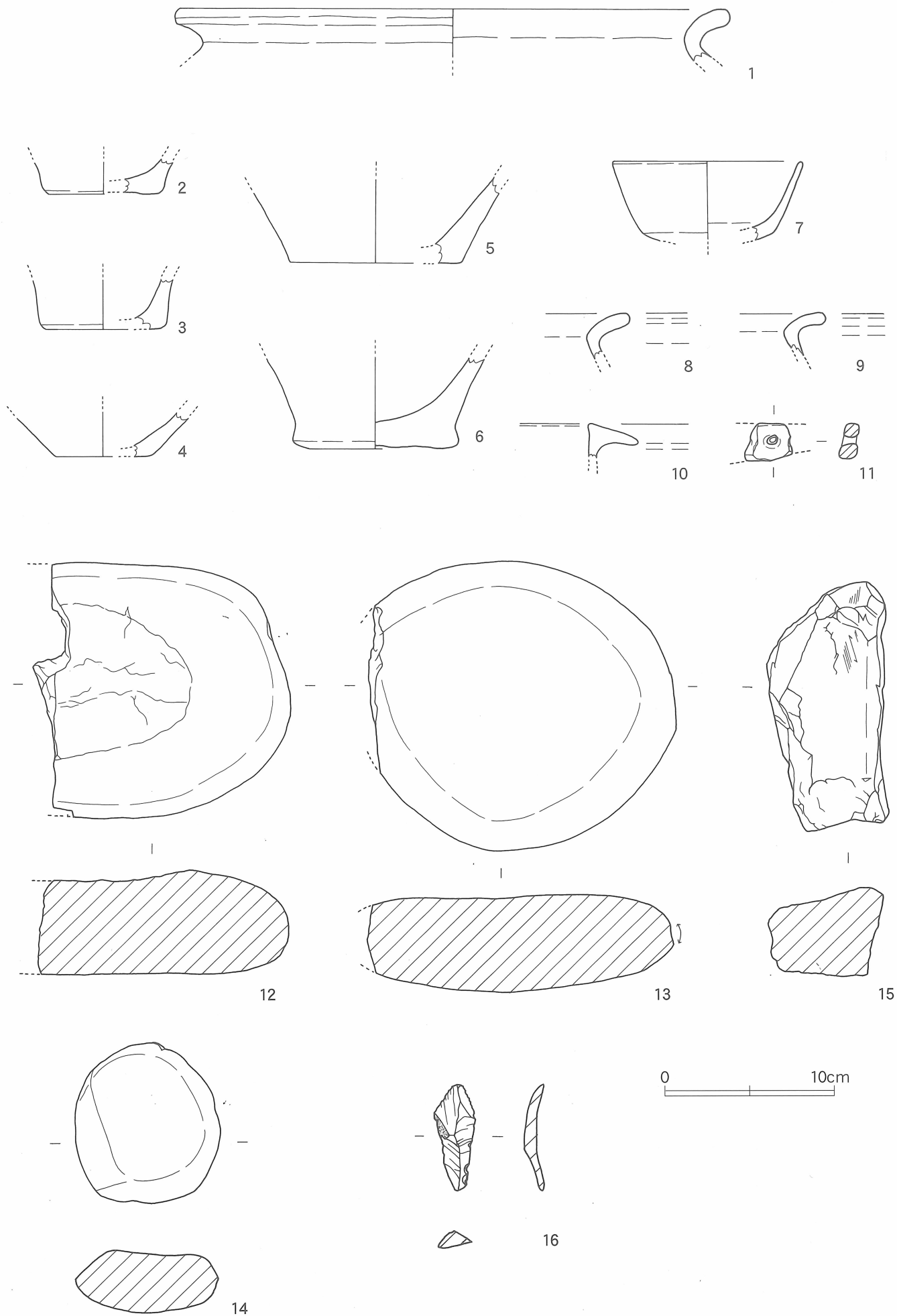
遺物として弥生式土器の甕、壺等が出土した。弥生時代中期中頃~後半を示す。



第5図 SD-03 A土層
断面実測図 [1/40]



第6図 SD-03 B土層
断面実測図 [1/40]



第7図 SD-03・05 出土遺物 実測図 [1/3]

4号溝 (SD-04) [第4図 PL2]

調査区南東端を南北方向に延びる溝である。規模は検出全長6.0m、幅0.24m、深さ5cmを測る。遺存状況は極めて悪く検出部中央付近では完全に途切れてしまっているが、この部分を復元した検出全長は10.8mを測る。溝方向がSD-02・03と異なることから、大きな時期差があるものと考えられる。出土遺物は確認出来なかった。

5号溝 (SD-05) [第4図 PL3]

調査区東側中央付近で検出した溝である。規模は検出全長4.4m、幅0.6m~1.1m、深さ5cm~6cmを測る。遺構検出当初、SD-03に流入する別存在の溝として調査を進めたが、現地調査後の精査でSD-03の流路の一つである可能性も考えられた。

出土遺物はごく少量出土したが、石器1点以外は細片の為図示していない。

溝状遺構出土遺物

土器 [第7図 PL6・7]

1~11はSD-03出土土器で、1は甕形土器の口縁部破片。2~6は甕形又は壺形土器底部で、4は壺形の底部か。甕形の底部形態はやや古相を示すが、壺形の底部は底部境が若干不明瞭となっており、前者と比較するとやや新相を示す。7は土師器の高坏受部で、古墳時代中期の所産と思われる。混入品か。8~10は甕形又は壺形土器の口縁部破片で、10は鋤先状口縁を成す。11は部位不明の破片であるが、胴部に付属する取っ手部分の可能性もある。

石器 [第7図 PL7]

12~14はSD-03出土石器で、12・13・14はデイサイト質の円礫である。12・13には平らな部分に平滑面があるが、砥石としては供されていない。15は砂岩製の砥石と思われるが、使用痕の痕跡はほとんど欠損しており、僅かに遺存しているのみであった。16はSD-05出土石器で、黒曜石製の縦長剥離片。自然面が残る部分を除いて、押圧剥離による2次加工が施されている。

(b) 不明遺構 (SX)

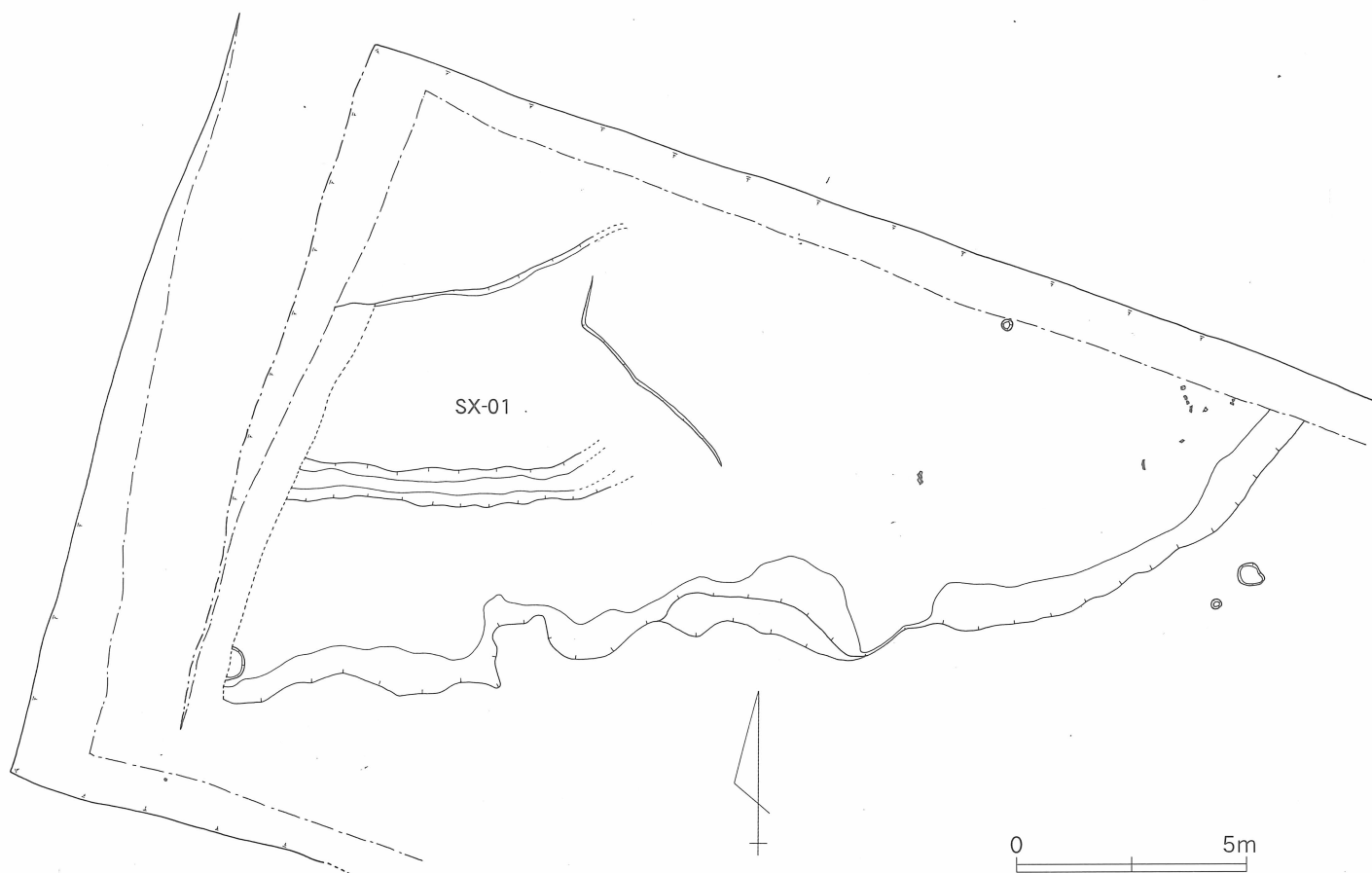
1号不明遺構 (SX-01) [第8・9図 PL4]

調査区中央~西側で検出した自然河川状の湿地状遺構である。長軸を西北西から東南東に取る。規模は検出全長8.0m~25.8m、幅8.0m~11.0+ α m、深さ0.16m~0.43mを測る。SB-03から標高を減じた位置にあり、遺構間の距離、配置状況が近似しているところから同時期に並存していたと予想される。西端部では中央付近に検出長6.4m、幅0.9m、深さ5~13cmの溝があり、一時期水流があった事がわかる。ただ、土層面の観察では砂礫層は確認出来なかったもので、大きな水流ではなかったであろう。本遺構の堆積土も黒灰色粘土が大半を締めて占めており、水流の存在よりも水の滞留があったものと考えられる。東側検出遺構群との標高差の関係から、本遺構は微高地から一段下がった谷状地形に出来た自然遺構と考えられる。

不明遺構出土遺物

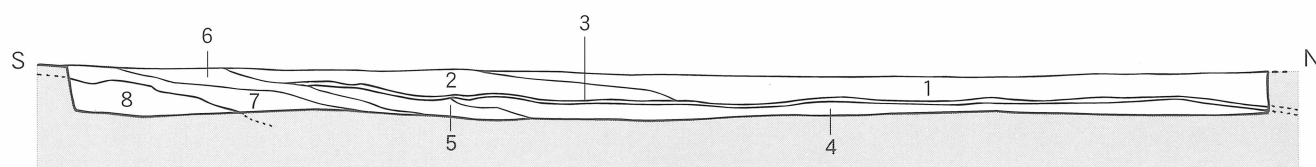
土器 [第10図 PL6]

17~26はSX-01出土土器で、甕形土器の口縁部破片。17~20は口縁部を強く水平気味に屈曲させるタイプで、21~24は口縁部を斜め外方に延ばすタイプ。頸部稜線の鈍いものが多い。25は突帯文土器系の口縁部だが、刻目の有無は不明。26は鋤先状の口縁部で、大きく内部へ突出する。27~32は甕形土器の底部破片で、底部の厚みが非常に薄いものが一部に見られる。



第8図 SX-01 実測図 [1/160]

H=24.00m



- | | | |
|------------------------------|-----------------------------|-------|
| 1. 黒灰色粘質土(粘性強く、鉄分由来の農茶色斑が多い) | 5. 淡灰色粘質土(粘性強い) | } 基盤土 |
| 2. 白灰色粘質土 | 6. 淡灰色粘質土(粘性強い、鉄成分の濃茶色斑多い) | |
| 3. 黒色粘質土(植物遺存体の炭化層、ワラ状の植物) | 7. 淡灰色粘質土(粘性強い、若干濃茶色気味) | |
| 4. 淡黒灰色粘質土(粘性強い) | 8. 淡灰色粘質土(粘性強い、濃茶色斑が非常に少ない) | |

第9図 SX-01 A土層断面 実測図 [1/50]

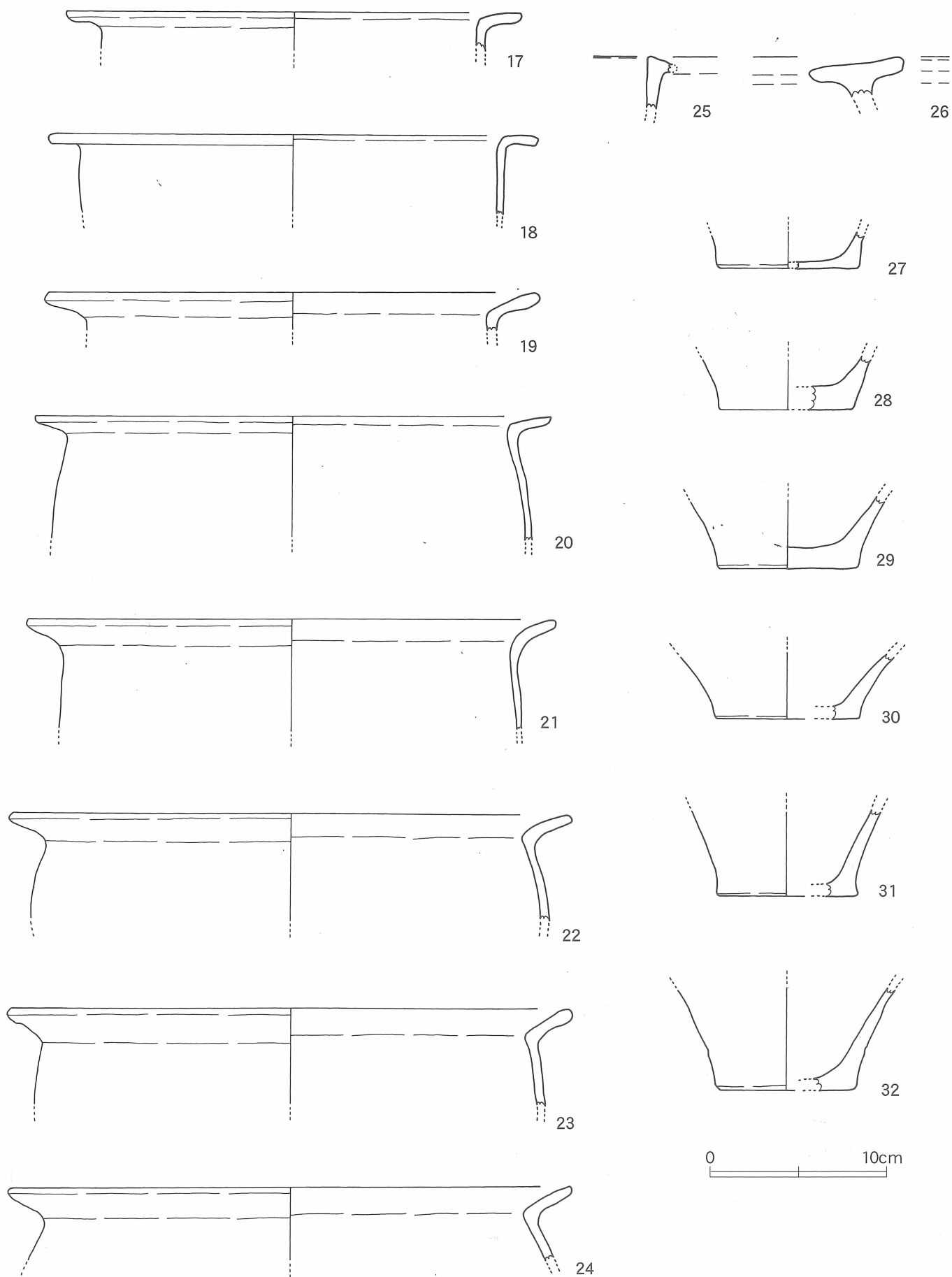
(c) 土壌 (SK)

1号土壌 (SK-01) [第4図 PL5]

調査区北東端で検出した平面不整長方形プランを呈する土壌である。長軸方位を $N-78^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長3.24m、短軸長1.64m、深さ0.16mを測る。埋土は基盤である黄褐色粘土に若干黒色が混入する程度の色調差であり、他遺構の黒茶色系のそれとはかなり異なっている。溝状遺構との並存ではないと考えている。出土遺物もなく、時期比定については言及出来ない。

2号土壌 (SK-02) [第4図 PL5]

調査区東側で検出した平面不整長方形プランを呈する土壌である。長軸方位を $N-36^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長1.44m、短軸長0.92m、深さ0.24mを測る。埋土の状況はSK-01と同様であり、时期的に近似するものと考えられる。出土遺物はなかった。



第10図 SX-01 出土遺物 実測図 [1/3]

第1表 一竿遺跡(3次調査) 出土遺物観察表

挿図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
第7図	1	8	SD-03	弥生式 土器	甕	32.0	—	—	(外) — (内) —	淡黄茶色、石英、片岩細 粒多、良好	
"	2	11	"	"	甕底	—	6.4	—	(外) — (内) —	淡褐色、石英・細粒多、 やや不良	
"	3	15	"	"	"	—	7.3	—	(外) ハケ? (内) —	淡赤褐色、石英・片岩粒 多い、良好	
"	4	2	"	"	甕底?	—	5.6	—	(外) — (内) —	淡黄茶色、石英・片岩粒 多い、良	
"	5	7	"	"	甕底	—	10.0	—	(外) — (内) —	淡黄灰色、石英・粒多、良	
"	6	1	"	"	"	—	9.8	—	(外) — (内) —	暗赤茶色、石英粒多、良	胎土非常に荒い
"	7	6	"	土師器	高坏	11.0	—	—	(外) — (内) ナデ	淡赤褐色、精良、良好	
"	8	12	"	弥生式 土器	甕	—	—	—	(外) — (内) —	暗茶褐色、石英細砂粒 多、良好	
"	9	5	"	"	"	—	—	—	(外) — (内) —	淡白褐色、石英・片岩細 粒多、良	
"	10	10	"	"	"	—	—	—	(外) — (内) —	淡黄褐色、石英細砂粒 多、良	
"	11	17	"	"	"	—	—	—	(外) — (内) —	淡黄茶色、精緻、良好	
"	12	19	"	石器	台石	15.1	15.2	6.1	—	—	表面に敲打でなくぼみ
"	13	21	"	"	砥石	17.2	18.1	5.6	—	—	平滑面有り2、650g
"	14	20	"	"	敲打石	9.4	8.5	3.5	—	—	手持ち叩き石? 400g
"	15	22	"	"	砥石	14.7	6.9	5.2	—	—	砂石製 660g
"	16	18	SD-05	石器	縦長剥 離片	6.3	2.4	0.9	3側辺に押圧剥離	—	黒曜石製7.8g
第10図	17	66	SX-01	弥生式 土器	甕	26.0	—	—	(外) — (内) —	淡白灰色、石英・片岩細 粒多、やや不良	
"	18	64	"	"	"	27.8	—	—	(外) ナデ? (内) —	淡黄茶色石英・片岩細 砂粒、良	
"	19	65	"	"	"	27.6	—	—	(外) — (内) —	淡白桃色、石英、片岩粒 多、良	第3層以下
"	20	54	"	"	"	29.0	—	—	(外) — (内) —	淡白桃色、精良、良	第3層以下
"	21	58	"	"	"	29.8	—	—	(外) — (内) —	明褐色、石英砂粒多、良 好	
"	22	51	"	"	"	32.0	—	—	(外) ナデ? (内) —	淡赤褐色、石英・片岩粒 多、良好	
"	23	53	"	"	"	31.6	—	—	(外) — (内) —	淡赤褐色、石英・片岩粒 多、良	
"	24	55	"	"	"	31.6	—	—	(外) — (内) —	淡灰褐色、石英・片岩粒 子多、良好	
"	25	24	"	"	"	—	—	—	(外) — (内) —	淡茶灰色、石英、長石細 粒多、良	第3層以下
"	26	23	"	"	"	—	—	—	(外) — (内) —	淡黄灰色、長石粒多、良	
"	27	59	"	"	甕底	—	7.8	—	(外) — (内) —	赤褐色、石英・片岩粒多、 良	第3層以下
"	28	52	"	"	"	—	7.8	—	(外) — (内) —	淡黄褐色、石英、片岩粒 多、良好	
"	29	63	"	"	"	—	7.8	—	(外) — (内) —	淡白灰色、石英・片岩細 粒多、やや不良	第3層以下
"	30	61	"	"	"	—	8.0	—	(外) — (内) —	淡赤褐色、石英・片岩細 粒多、良好	第3層以下
"	31	62	"	"	"	—	7.8	—	(外) — (内) —	淡黄茶色、石英・片岩細 砂粒多、良	
"	32	56	"	"	"	—	8.0	—	(外) — (内) —	暗赤褐色、石英・長石粒 多、良	

IV まとめ

今回の調査は平成8年度、及び、平成10年度に発掘調査が行われ、多数の住居跡が検出されました一竿遺跡（1次・2次調査）に続く第3次調査でありました。

調査着手前には1次・2次調査同様、弥生時代の前期・中期の集落跡の続きが検出されるものと予想していましたが、重機により表土を除去しますと現地表面の1.5m下からは予想していた住居跡などの集落痕跡ではなく、大きな湿地状の遺構と主に南北方向に流路をもつ溝状の遺構、そしていくつかの穴のみの検出となりました。

しかし、調査を進めていくと人工的に掘削されたと考えられる溝を境に標高（遺構を検出した面の地面の高さ）が西に向かって下がっている事がわかり、この地点が一竿遺跡（1次・2次調査）で見つかっていた集落跡の西側端付近である事が判明しました。

市内各地の発掘調査でも集落の端を捉えられる事はあまりなく、1つの集落の全体形を考える時に必ず必要となる端部を見つけた事は、この一竿遺跡を考える上で非常に大きな発見であったと考えています。

今後は周辺に多数展開している弥生時代の遺跡群との時間的な関係や各遺跡間の繋がりを調べ、立野や蒲原地区の弥生時代においての状況を探求していこうと考えています。

PLATES

凡例

出土遺物に関する記載は、以下の要領となっている。



(出土遺構番号)

(掲載番号)



一竿遺跡（3次調査） 前風景



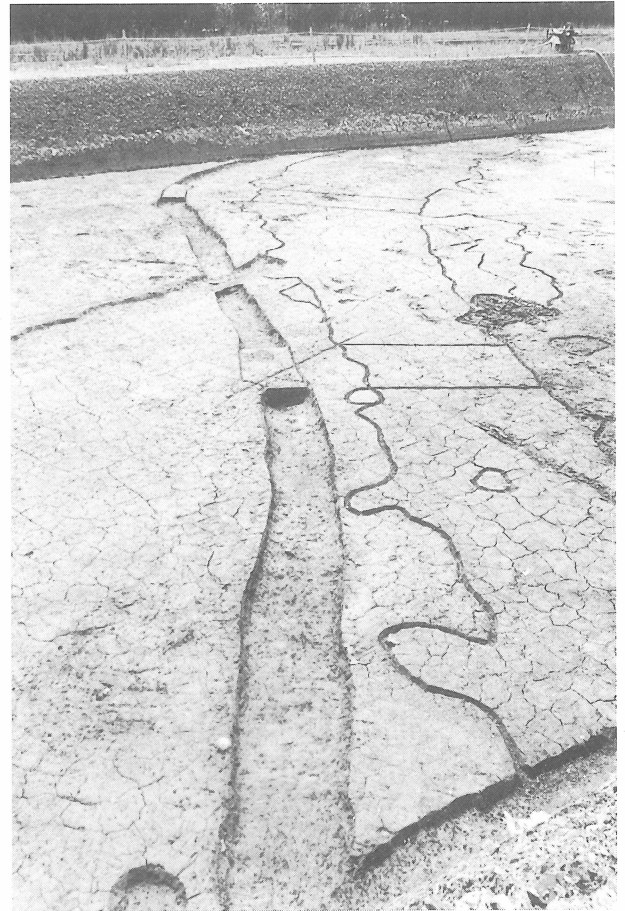
遺構検出状況



調査区全景（東より）



SD-01全景 (東より)



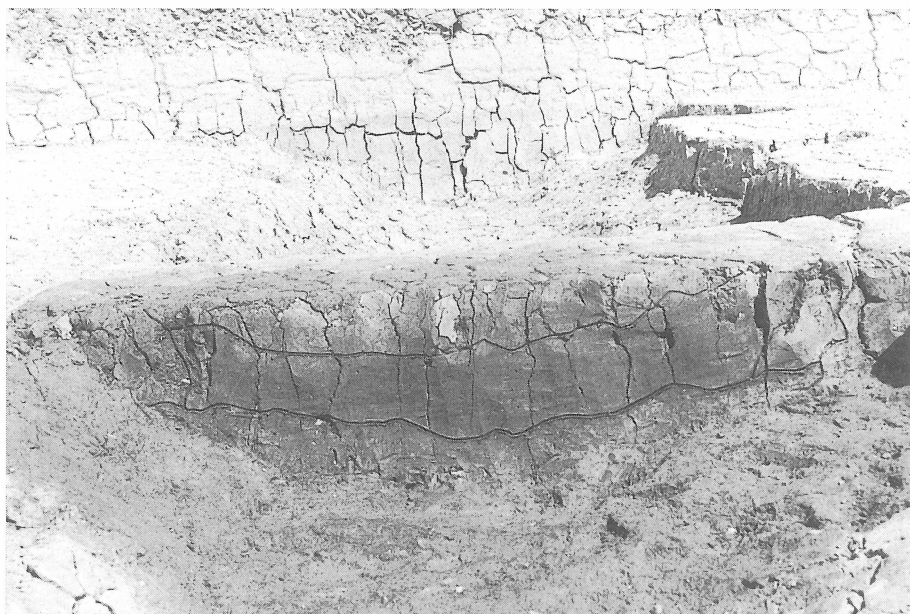
SD-02全景 (北より)



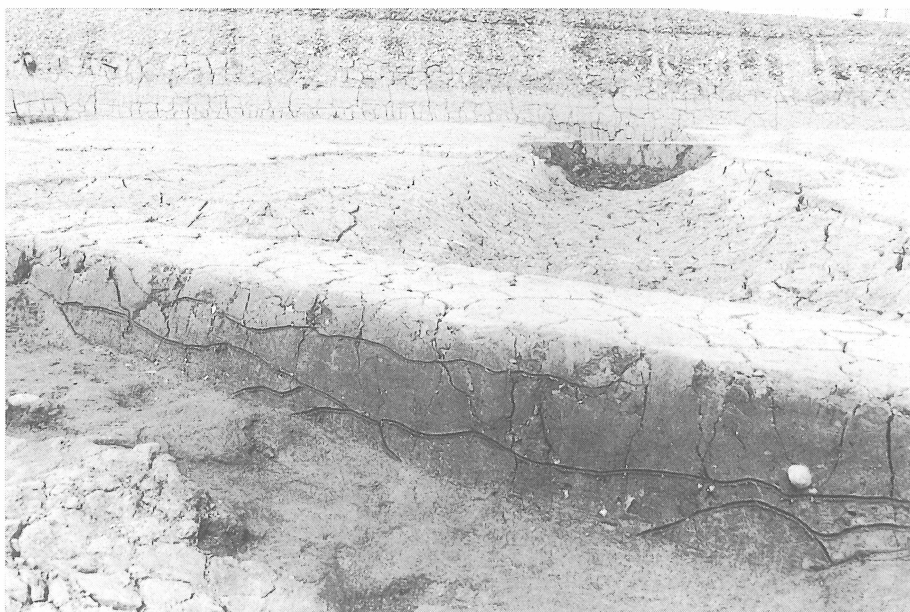
SD-03全景 (南西より)



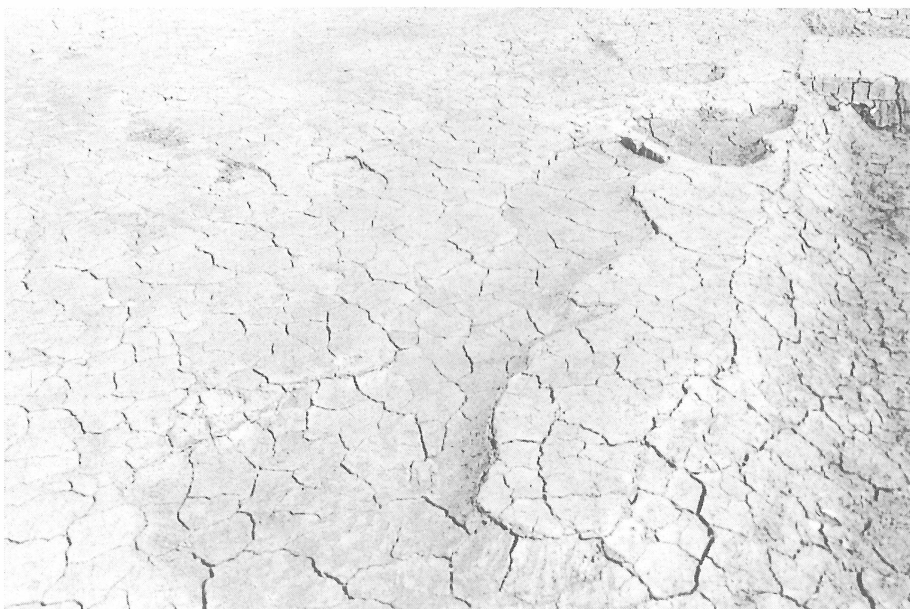
SD-04全景 (北東より)



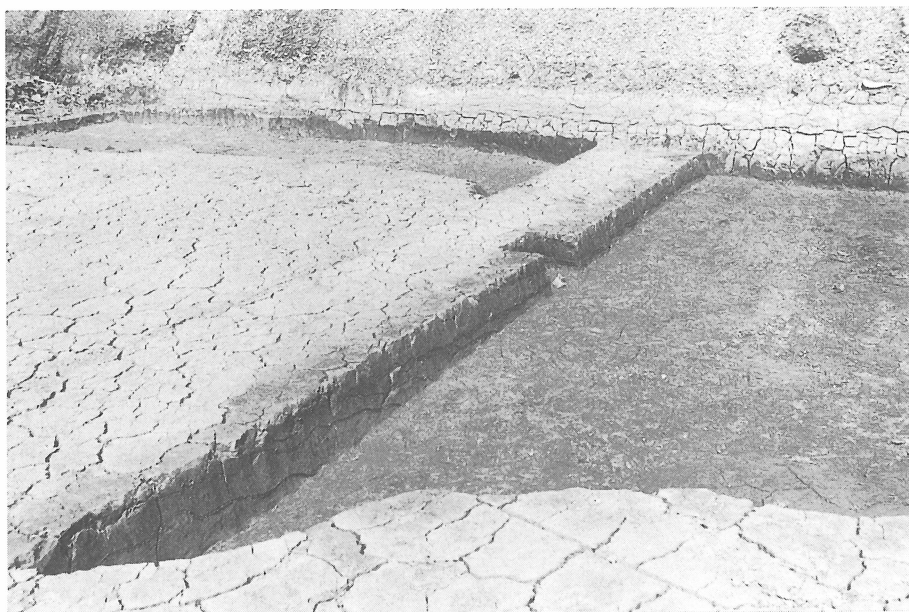
SD-03 A土層 (南から)



SD-03 B土層 (南から)



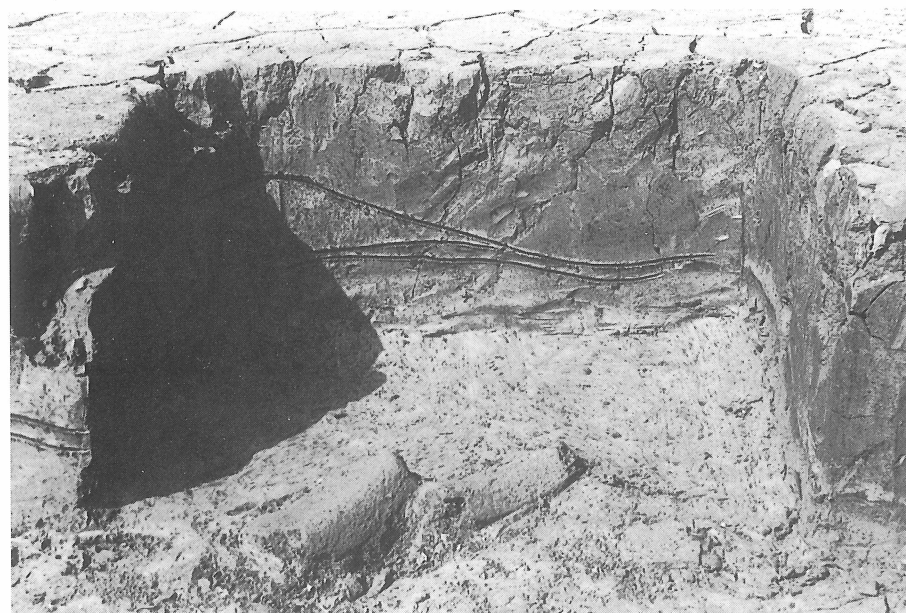
SD-05 全景 (南から)



S X - 0 1 A土層 (南東より)

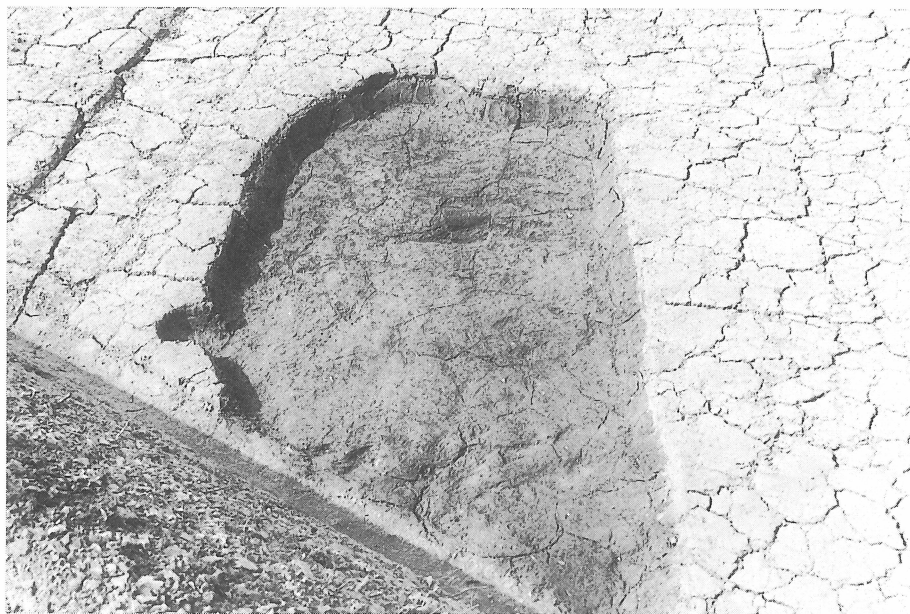


S X - 0 1 土器出土状況

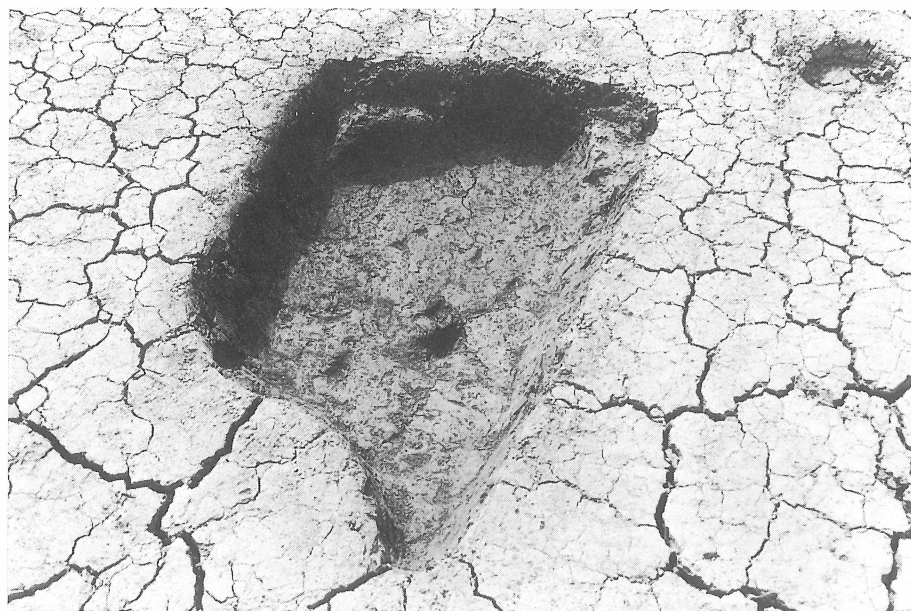


S X - 0 1 A土層中央付近

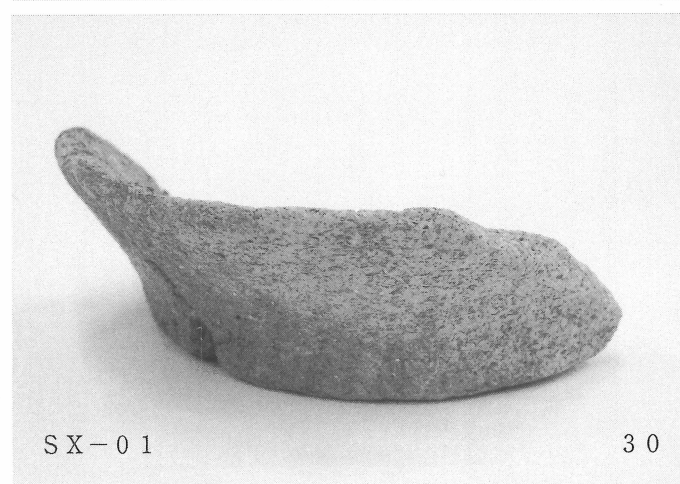
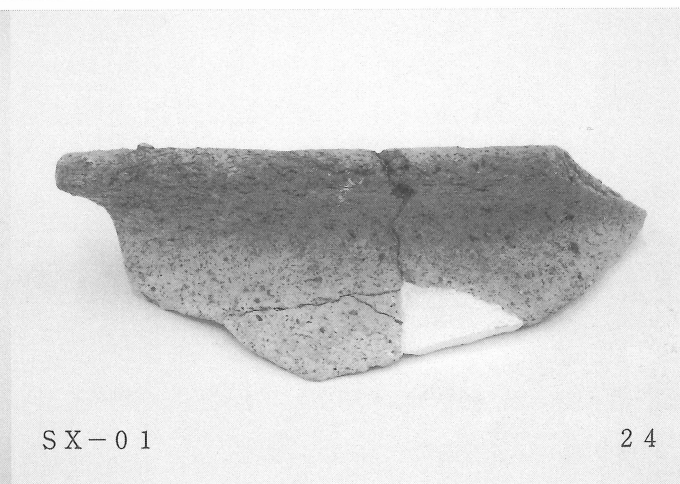
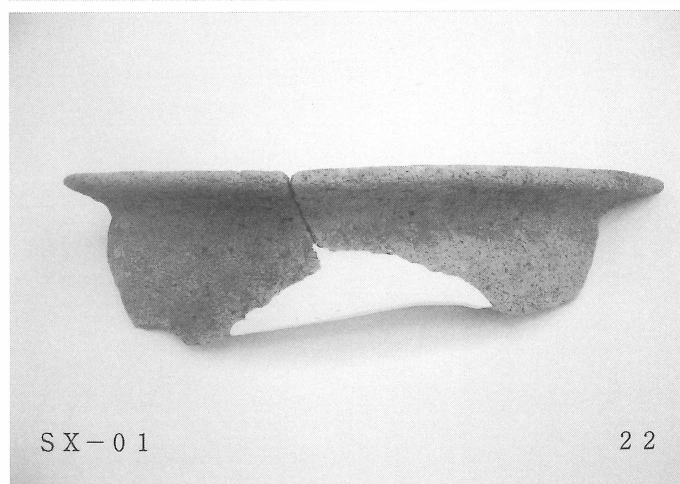
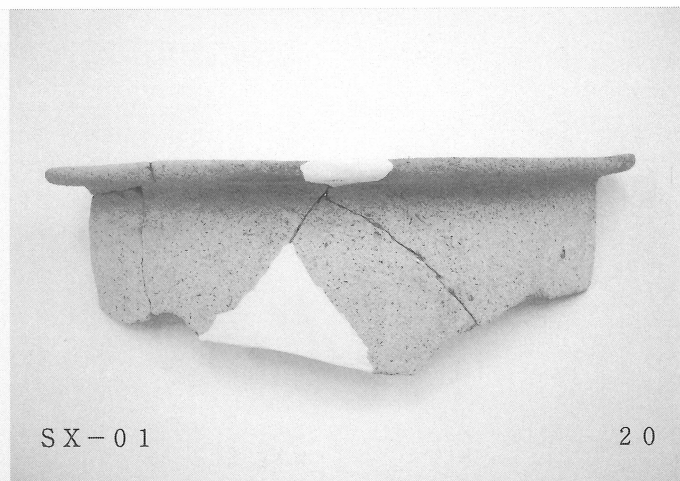
PL 5

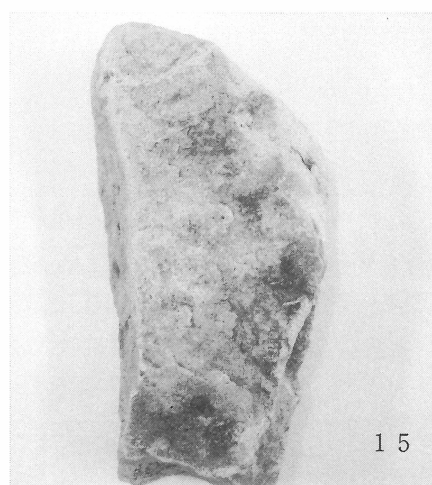
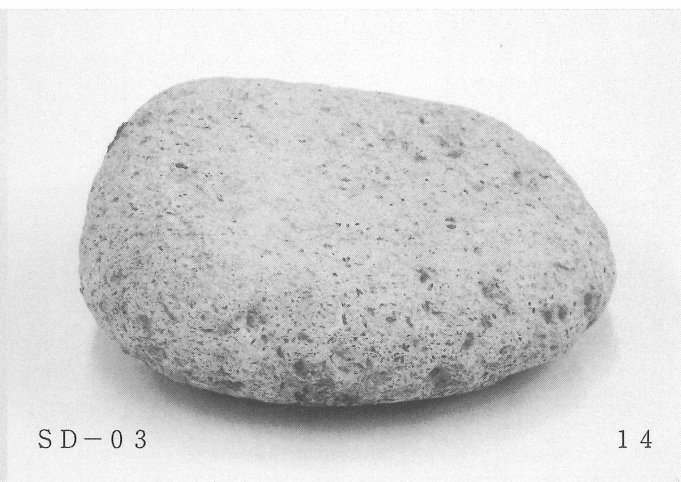
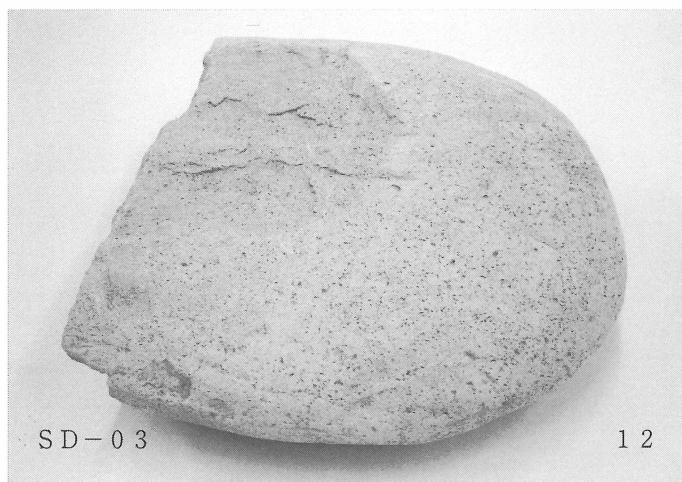
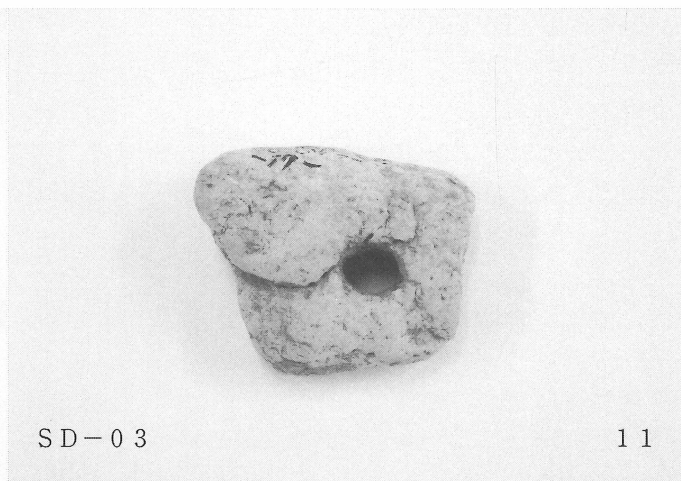


SK-01 全景 (東より)



SK-02 全景 (北東より)





報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひとさおいせき							
書 名	一 竿 遺 跡（3次調査）							
副 書 名	福岡県八女市立野字一竿所在遺跡の調査報告書							
巻 次	第2冊分							
シ リ ー ズ 名	八女市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第 82 集							
編 著 者 名	大 塚 恵 治							
編 集 機 関	八女市教育委員会							
所 在 地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL 0943－23－1982							
発 行 年 月 日	西暦 2008年 3 月31日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調 査 期 間	調 査 面 積 m ²	調 査 原 因
		市町村	遺 跡 番 号					
ひとさお 一竿遺跡 （3次調査）	ふくおかけん 福岡県 や め し た て の あ ざ ひとさお 八女市立野字一竿	402109		33° 12' 22"	130° 32' 16"	2006 08 21 ～2006 11 27	約800m ²	店舗兼資 材倉庫の 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
一竿遺跡 （3次調査）	集 落 跡	弥生時代	土壙、溝 湿地状遺構		弥生式土器 石器			

一竿遺跡(3次調査)
八女市文化財調査報告書
第82集

平成20年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (資)東兄弟印刷所
八女市祈祷院563